まなざしの輝き

わたしたちを無から引き離すのは何か

第２章

《どのようにして埋めるのか、この人生・いのちの大きな隔たりを？》

わたしたちの注意の中心に据えた問い《わたしたちを無から引き離すのは何か》は基本的なものです。生きるという避けることのできないドラマの中で、わたしたちの傷つきやすさと無力さに屈服しないためにはどうすればいいのでしょう？意味の欠如に対して何が答えとなり得るでしょう？わたしたち一人ひとりを揺さぶり、命を脅かした新型コロナウィルスによる攻撃は問いをさらに鋭いものにしました。そして、答えについての試みをより明確に評価する立場に置きました。

１．不十分な試み

a）もはや誰をも納得させない主張

一部の人々は、押し寄せてくる無の挑発に打ち勝つためには、それについて*話す*ことで十分だと考えています。しかし、わたしたちの経験からわかるように、まったく話しだけでは十分ではないのです。ある考え方、哲学、心理学的あるいは知的な分析、それらは人を再出発させ、望みを活性化し、自己を再び生かすことはできません。図書館にはその類いのもので溢れ、ネットのおかげですべてが手の届く範囲にありますが、無は変わりなく蔓延しています。この不十分さは、わたしたちが自分の奥深いところで激しく揺れるものに注意を払えば払うほど意識的になります。《人間においては、曖昧にされ、抑圧され、無視され、歪められている何かがかかっている。このようなよろいを貫くにはどうすればいいのか。そして、そのよろいを貫くことがその人の究極的に求めるものであるかどうかを知るにはどうすればいいのか。人間の行動の研究に専念し、その人間の狼狽をなおざりにしていることが多すぎる。》[50]

わたしたちの耳に入り、そして自分たちが発する多くの言葉の多くも空回りしています！シェイクスピアは、《奴らのしゃべることで道理といやあ、四斗俵の籾殻の中に紛れこんだ、せいぜい小麦二粒ってところだ。まる一日かかってやっと見つけた

[50] A.J. Heschel, *Chi è l'uomo?*, SE, Milano 2005, p. 18　逐語訳

© 2020 Fraternità di Comunione e Liberazione

が、見つけてみれや、骨折り損ってやつよ》[51]という痛烈な言い方でそれを暴いています。理性は現実的な内容に欠いた議論で空回りすることができます。《知性は[…]常に様々な概念の戯れに逸脱するよう誘惑され、現実に結ぶつながりを打ち砕いたことに気づかず、それに魅了されることがある》[52]のです。

要するに、いくら正しく適正な概念を提案したところで十分ではないのです。だから、その概念が人生・いのちを引きつけ、その特徴である渇きを満たすのではありません。《宗教的な話》でさえ—《ばらばらな考えの寄せ集めに過ぎないスピーチとなり、人に訴えるには足りないものとなるでしょう》[53]—今日の人々を惹きつけるのではないのです。ニヒリズムの沼地から脱出するには、宗教的な見方をすること、神について話すこと、または超自然や神聖について話すことでは十分ではありません。文化的に信仰の厚い者であっても、キリスト教徒であってさえも、口にする言葉や公言する価値観を度外視して、絶望に至るまでの、人生・いのちの空虚を経験することがあります。抽象的でモラリスト的な説教—それが宗教的であっても、世俗的であっても—がわたしたちを無から引き離すのではないのです。エフドキーモフは《話（言葉）ではもはや十分ではない。歴史の時計は、キリストについて話すという問題だけではなく、むしろキリストになる時を示している。キリストの存在と言葉の場となる時を》[54]と言っています。概念は、それがまったく完璧なものであっても、無に打ち勝つもののかけらさえももたらすことができません。どのようなグノーシス主義も、具体的で実在的なニヒリズムと競うことはできないのです。危険を切り抜けようとして、概念を変えたり知的な知識を増やしたりしても十分ではありません。

ドストエフスキーは現実的な経験に欠けている中身のない話に対する耐え難さを《そんなひとりよがりのおしゃべり、そんな際限もない陳腐なたわごとのくりかえしは、この三年のあいだに、それこそへどが出るくらい、さんざ聞きあきましてね［…］他人が話すのを聞いているだけでも、こっちの顔が赤くなるほどですよ！》[55]と表現しています。今の時代に、より浸透しやすくなり、わたしたち自身が経験するこの耐え難さの理由は、フォン・バルタザールが《美を主張する力がないとする世の中では、真実のための主張はその論理的結論を出す力が尽きてしまった。つまり、推論は事前に決められたリズム、回転式機械か分単位で決まったデーターを出さなければいけない電子計算機のように周るが、結論[その論理、推論の]に導く過程は、もはや誰をも

---

[51] W. シェイクスピア、ヴェニスの商人、第 1 幕 1 場、中野好夫訳、世界文学全集 1、集英社　東京 1969 年 pp. 202-203

[52] F. Varillon, *L'umiltà di Dio*, Qìqajon - Comunità di Bose, Magnano (Bi) 1999, p. 30　逐語訳

[53] フランシスコ, 使徒的勧告福音の喜び 147

[54] P.N. Evdokìmov, L'amore folle di Dio, San Paolo, Cinisello Balsamo (Mi) 2015, p. 63　逐語訳

[55] F. ドストエフスキー、罪と罰、江川卓訳、世界文学全集 27、集英社　東京 1968 年　pp.127-128

© 2020 Fraternità di Comunione e Liberazione

釘付けにすることができないメカニズム（しくみ）である。さらに、その結論はもはや結論になっていないのである》[56]と示しています。真実であることを言うにしても、惹きつける美―«*pulchritudo est splendor veritatis*»[57]聖トマスは美を真実の輝きだと断定する―として、それが目の前で起こらないなら、わたしたち自身も他の人も誰をも釘付けにすることができないのです。フォン・バルタザールは、さらに《もし、聖トマスが美の証拠だとする、*真実 verum* に*輝き splendor* が欠けるなら、真実の認識は慣例的および形式的なものになる》[58]と言います。

b）ルールの増加

ある人々は、実存的ニヒリズムに対する対抗策はある*行動基準*だと考えます。こうして義務、《やるべきこと》への訴えを増し、外見上、自分自身が生きのびることや様々な利益のために従順、敬意を奪起させるのです。けれども、それらは少しも自己の不快さ、意味を求める切実さに答えないのです。《意味が欠けていると義務だけで、役に立たない“なければならない” が残り、それはわたしをさらにどん底に引き寄せます。》[59]と前に引用した若い友人の手紙にありました。このような感覚はトルストイによって《こうした目ざめの後は彼（ネフリュードフ）はきまって自分の生活条件を作成し、終生それを遵守（じゅんしゅ）するつもりになるのだった。日記をつけ、新生活をはじめて、もう絶対に裏切るまいと心がけた。――彼が自分に言い聞かせた表現をかりると、*turning a new leaf*[新しいページをめくる]のだった。ところがそのたびに［…］また足を踏みはずす、しかもまえよりもさらに低いところへ転落してしまうことがしばしばだった》[60]と、うまく表現されています。　行動基準は共有できるものであっても十分ではないのです。フォン・バルタザールはその深い理由を《もし *bonum*（善）に、アウグスチヌスにとってその善の美しさのしるしである *voluptas*（喜び）［わたしたちの人格を惹きつけ、満足、喜びの経験を可能にする魅力］が欠けるなら、善との関わりは功利主義および快楽主義に留まる》[61]と再び明らかにしてくれます。

---

[56] H.V. von Balthasar, *La percezione della forma. Gloria. Una estetica teologica*, vol. I, Jaca Book, Milano 2005, p. 11　逐語訳

[57] «*Pulchritudo consistit in duobus, scilicet in splendore, et in partium proportione. Veritas autem habet splendoris rationem et aqualitas tenet locum proportionis*» (San Tommaso, *Commentum in Primum Librum Sententiarum*, distinctio III, quaestio II, expositio primae partis.　逐語訳

[58] H.V. von Balthasar, *La percezione della forma. Gloria. Una estetica teologica*, op. cit., p. 138.　逐語訳

[59] 導入の注 17 の後の手紙の部分

[60] L. トルストイ、復活　工藤精一郎訳、集英社、東京　1968 年　p.102

[61] H.U. von Balthasar, *La percezione della forma. Gloria. Una estetica teologica*, op. cit., p. 138.　逐語訳

© 2020 Fraternità di Comunione e Liberazione

わたしたちは皆、道徳的な努力、自分の尺度に従った取り組みに、完遂、満たされることへの渇きに対する答えを求めようとする試みのもろさを知っています。しかしながら、大人は人生の計画、プランの無力さと、心の奥底の要求を満たすための《やるべきこと》と共生することに慣れてしまうことがあっても、若者にとって、空虚の感覚と意味への渇望は知らぬふりをしている時にも身を焦がすもので、矛盾しているかもしれませんが、どうにかしてその要求を満たす道か、あるいは逃げ道を探します。数ヶ月前にコッリエーレ・デッラ・セーラ紙に載った《弱さと孤独、こうしてわたしたちの若者は倒れる》と題する記事に、スザンナ・タマーロは《ディスコで熱狂的な一夜を過ごした友人同士のグループが、衝突事故で命を落としたとの悲しいニュースを見ない週末はない。このような悲劇を食い止めようとして、新たな対策が講じられる。それは、厳しい監視、ディスコの出口でのアルコール度検査、若者を無事に家に送り届ける交通手段。当然必要な対策で、ある意味救済をもたらすものだが、有刺鉄線で深い溝を囲もうとするのとあまり変わらない。誰かは救われるかも知れないが、深い溝は目の前から消えない。[…]わたしを驚かせるのは、繰り返されるこれらの出来事を見て「一体何が起こっているのだ？」と立ち止まって言う人がいないことだ》[62]と書いています。

生活上の具体的な深い溝を目の当たりにして、その解決法が《有刺鉄線》であると考えることはできません。空虚から人生・いのち・生活を守るためにはルールや杭、制限では十分ではないのです。これがわたしたちの存在の神秘に対する答えではあり得ないということを、経験は常に裏付けています。わたしたちを衝動、渇望やあまりにも大きい望みから守る限度という行動基準、ギリシア人が《適切な尺度》と呼んでいた行動基準に、より洗練された名前をつけても物事は変わらないのです。ガリンベルティは《望みに限度がないわたしたちの文化に、この限度の文化が取り入れられたらいいと思う》[63]と言います。

それでは望みは修正されなければならない欠陥なのでしょうか。ギリシア時代から今日に至って、計り知れず、過度で、途絶えることのない望みを前に、唯一の対策は縮小することのようです。容認できる範囲に縮小しようとする執拗な戦いは、多かれ少なかれ、その構造的な計り知れなさと、不安にさせるほど過度であることをより明らかに裏づけます。ルールを課し、範囲を決めて望みを制御するといういかなる試みの失敗は、それが矮小化できないことを示し、わたしたちの存在の奥底にアウグスチヌスの *cor inquietum*（安らぎのない心）が永続することをあらわにします。

---

[62] S. Tamaro, «Fragili e soli, così cadono i nostri ragazzi», *Corriere della Sera*, 18 ottobre 2019　逐語訳

[63] U. Galimberti, «Il greco senso della misura», *D la Repubblica*, 16 novembre 2019, p. 182　逐語訳

© 2020 Fraternità di Comunione e Liberazione

c）望みのバー（棒）を下げる

望みを矮小化し修正する試みは後を絶たず、至るところにあることを、ルイーザ・ムラーロは《錯覚と異議は、わずかなことで満足するという自己節制によってもたらされる。錯覚はわたしたちが自分たちの要求の膨大さを過小評価し、当然限界のあるわたしたちの力に比例させなければいけないと考えることから始まる》と注意します。結果として《本当に興味のあることをするのでも、もはや真に関心があることをするのでもなく、自分たちにとっての本物の利便性を求めるのでもなく、 コマーシャルにあるような限られたものに望みを》順応させます。《実際にわたしたちはわずかなものを得るために多く労苦することになる》[64]のです。心をごまかそうとして、わたしたちの望みのバーを下げるのです。ある若者が《ぼくは自分の望みの背丈で生きることに苦しい思いをするので、よく望みを下げて、より少ないもので満足します》と書いてきました。モンターレは《無意味なもので空虚を埋める》[65]《時間をまぎらすことは、あの空虚を埋める仕事で埋め尽くさない限りできない。その空虚を瞬きせずに注視できる人々は少ないため、社会的に何かをする必要が生じる。たとえその何かが、あの空虚が自分の中に再び現れるという漠然とした不安を麻痺させるためだけであったとしても》[66]と言っていました。

今日、わたしたちの望みを本質的に織り成すものを見出すことほど決定的なことがあるでしょうか。ドゥ・リュバックは《本当に明確にすべき大切なことは、人間の弱さのために多かれ少なかれ負うものではなく、その望みの本質と重要性である》[67]と指摘しています。今の時代のもっとも油断にならない威嚇は、まさに人間の望みの本物の背丈を軽んじていることです。望みを軽んじることは、色々な行程をたどり、人々の人生・いのちを支配しようとする者によって異なった方法で助成されるのです。

ルイスはその俊敏さでこの概念を悪魔に言わせる《どんな人間の場合でも、そのもっとも深層に位する好みとか衝動こそ、「敵」が人間に与えている素材、いうならば人間にとっての出発点なのだよ。だから、そうしたものから人間を遠ざけることができれば、われわれは点をかせいだことになるし、どうでもいいような事柄においてさえ、人間本来の好悪の情をしりぞけて、現世的な基準とか、習慣とか、流行を重んじ

---

[64] L. Muraro, *Il Dio delle donne*, Mondadori, Milano 2003, pp. 31-32　逐語訳

[65] E. Montale, *Nel nostro tempo*, Rizzoli, Milano 1972, p. 18　逐語訳

[66] E. Montale, «Ammazzare il tempo», in Id., *Auto da fè*, Il Saggiatore, Milano 1966, p. 207　逐語訳

[67] H. de Lubac, «Ecclesia Mater», in Id., *Meditazione sulla Chiesa*, vol. 8 – *Opera omnia*, Jaca Book, Milano 1979, p. 188

© 2020 Fraternità di Comunione e Liberazione

させることは常に願わしいのだ。》[68]これが悪魔的な策略です。わたしたちの気を紛らせることによって、もっとも奥深い推進力、わたしたちを成している望みから引き離すことです。しかし、わたしたち自身から引き離そうとあらゆる権力が利用する気晴らしも、新型コロナウィルスのこの時世で見てきたように、現実がわたしたちを再び揺り動かすと、いつものごまかしの気泡がつぶれ、底が割れていることが明らかになります。気晴らしに対して、墓碑銘のように思えるラッパーのマッラカシュの言葉を借りるなら《空虚ではなく、時間を埋める》[69]のです。

２．わたしたちの人間性

現実全体に対する興味を再び目覚めさせ、わたしたちの全身全霊を惹きつけるほどの何かが起こらないなら、すべては馴染みのないものになるのです。ジョゼフ・ロートが《彼ら一人ひとりの周りに馴染みのなさが増し、それぞれはガラスの球の中に閉じこもっているかのように座っていた。互いを見ていたが届かなかった》[70]と言っているように。話が世俗的であろうと宗教的であろうと、単純であっても、義務や《やるべきこと》への呼びかけ、それが宗教の名のもとであっても、望みを衰弱から、そして前に触れた興味の麻痺状態から徹底的に救うことはできません。

若い友人からもらった手紙がそれを裏付けています。《“わたしたちを無から引き離すのは何か”という問いへの答えを、すでに知っていると思うことが自分のもっとも大きな誘惑だということに気づきました。けれども実際には、わたしは常に無に瀕(ひん)しています。すべてのこと、彼女や勉強、卒業することさえ退屈になり得るのです。すべてが同じで遠くに感じます[望みを満たすには不十分]。この無関心については後にしか気づかず[愛情でさえ免れない]、見つめれば見つめるほど自分がすでに知っていると思うこととも矛盾するようです。大学の同級生と話すだけでも無に囲まれていることに気づきます。わたしたちの会話は、少し前に話していたことを思い出すことなく次から次へと話題を移すという無の象徴です。このような時に気づくことがあります。それは、自分は無のためにはつくられていないと言うことです。中身のないことを話したくないし、自分をとらえ、無から引き離す何かが必要なのです。だけど、気づくだけではそれをキャッチするには不十分のように思えます。》

---

[68] C.S.ルイス、悪魔の手紙　C.S.ルイス著作集 1、中村妙子訳、すぐ書房、東京　1996 年、p.369

[69] «TUTTO QUESTO NIENTE – Gli occhi», di Marracash, 2019, © Universal Music　逐語訳

[70] J. Roth, Lo specchio cieco, in Id., Il mercante di coralli, Adelphi, Milano 1981, p. 63　逐語訳

© 2020 Fraternità di Comunione e Liberazione

逆に自分は無のためにつくられていないということに気づくことは、何が自分を無から引き離すかを見出すための道のりにとって決定的で不可欠な要因なのです。つまり、人間としての、自分自身の人間性の要求の発見です。

ごまかされることを許さず、からかうことはできない、自分の意志で選んだ答えでは満足しないこのわたしたちの人間性とは、一体何でしょうか。ごまかしや気晴らしは不快さを覆うことはできるけれども、無から引き離すことはできません。傷つき、みすぼらしく、混乱していても、わたしたちの人間性はまごつかされることなく、道行く人にからかわれることはないのです。それは、思うほど混乱してはいないというしるしです。時々ではあっても、誠実さか、注意か、究極的モラルかに欠けるため、本物ではないものに応じて魅了されることがありますが、早かれ遅かれまさにわたしたちに内在する人間性が、大きな思い違いに従ったことに気づかせてくれるのです。*幻想の過去*という共産主義の錯覚についてのフランソワ・フュレの著書のタイトルにあるように。

わたしたちの人間性は、最終的には避けられない重要な堤防です。経験においてそれを見て驚くのです。ルイスは《経験についてわたしが好もしく思うのは、それが真っ正直だということだ。人は何度となく間違った曲がり角を曲がるかもしれない。しかし目をしっかり見開いていればあまり遠くまで迷い出ないうちに警告の信号が現れるだろう。人がいかに自己欺瞞におちいろうとも、経験が人をだまそうと試みることはない。人が公正な態度でテストにかける時、宇宙という鐘はどこをついても真実の響きをとどろかせるのである》[71]と書いています。しかし、ここが重要なポイントですが、経験は、判断、評価を伴います。したがって、一つの基準に基づいて判断が下されるのです。その基準とはどんなものでしょう？それは、わたしたちの人間性です。これは単にわたしたちを苦しめるもの、意に反して負わなければならない重荷、わたしたちの現実との関わりを阻む埋めることのできない溝ではないのです。そうではなく、それはまさにわたしたちの判断の基準なのです。

わたしは、すべての物事との関わりにおいて経験をするのを可能にする判断能力を自覚した驚きの瞬間に、飛び上がって喜んだことを今も覚えています。事実、経験は、わたしたちの人間性という基準によって判断された体験です。その人間性とは、根源的な要求と明らかな事実の総体で構造的にわたしたちに備わっていて、わたしたちに向かってくるもの（物事）と照らし合わせることによって始動します。わたし

[71] C.S.ルイス、不意なる歓び、C.S.ルイス著作集 1、中村妙子訳、すぐ書房、東京　1996 年、p.234

© 2020 Fraternità di Comunione e Liberazione

は、自分自身の内にある要求と明らかな事実の総体が起こることを判断する究極の基準であることを見出したのです。

わたしたちの人間性の認知範囲の認識が、ジュッサーニに《愛情と情熱がこもった自分自身についての鋭い意識によってのみ、キリストに対して心を開くこと、彼を認めること》[72]、生き甲斐となるものをキャッチすることができると言わせたのです。この同じ情熱、注意、優しさが自分自身に対するまなざしの特徴であるか問うべきです。時折、それはわたしたちが住んでいるこの地球とは異なる銀河のことであるかのように思えることがあるからです。ジュッサーニの《人間はまったく人間なのだ！人間は何と人間的なのだ！》[73]という言葉は何と感動的でしょう。わたしの人間性は何と人間的なのでしょう！わたしたちは、多くの場合、自分の人間性に対して情熱ではなく恐れを感じます。そのため混乱し、真実をとらえることができず、最終的にはすべてが抽象的なものに消え失せるのです。ドストエフスキーが《深いもの思いに、というより、一種の放心状態におちたらしく、もうなににも目をやるでもなく、いや、どだいそんな気もないふうに歩き出した》[74]と言っているように。

わたしたちが自分の人間性をかっこでくくってしまえばしまうほど、起こる事柄の価値を認めることに躊躇し、進むべき方向に確信が持てないのです。それは、スペイン人の詩人ヘズス・モンティエルが、新型コロナウィルスのため外出自粛していた時に自分の子供たちを見ていて感動したということの逆です。《子供たちはずっとわたしを驚かす。わたしたち大人と違って、外出自粛の間、一度も不平不満を言わなかった。子供にとって真の正常さは家族だから状況を受け入れた。子供は、愛情のこもった環境―完璧である必要はない―で育つとより多くのことを要求しないことに気づいた。[…]あなたたちがいたら十分、と彼らは言う。[…]子供たちは、わたしたちが何か計画のためではなく、愛し愛されて生きるためにつくられている証拠だと思う。その場合のみ偶発的な状態は意味を持ち、現在は揺るがない》[75]のです。

子供たちは生きるために必要なもの、つまり、両親の存在を容易にとらえるのです。反対に、わたしたち大人は難渋し、しばしば不平不満に陥ります。もちろん、子供たちの素朴な人間性を保ち深める大人もいます。エッティ・ヒッレスムはその明らかな例です。著書の*日記*に《わたしの神よ、わたしをこのようにつくられたことを感謝します。時々、豊かさで満たされることがあるからあなたに感謝します。この豊か

---

[72] L. ジュッサーニ、キリストの主張の起源に、 ドン・ボスコ社、東京 2015、p.9.

[73] L. Giussani, Affezione e dimora, Bur, Milano 2001, p. 42.　逐語訳

[74] F. ドストエフスキー、罪と罰、江川卓訳、世界文学全集 27、集英社　東京 1968 年　p.8

[75] J. Montiel, The Objective, 2 de abril 2020.

© 2020 Fraternità di Comunione e Liberazione

さはあなたに満たされるわたしの存在以外の何ものでもありません》[76]と記しています。

3．《人を丸ごと“感じる”技》

わたしたちのうちの誰が日常的に一瞬でも自分自身、自分の人間性に対して本物の優しいまなざしを向けるでしょう？何度となく、偽りにそそのかされない自分の人間性に対して怒りを浴びせ、自分自身をいじめます。つまり、わたしたちは（自分の人間性から）逃げたいと思う一方、それを消し去ることができません。*悦ばしき知識*でニーチェが旅人に言わせる一節《真実、現実、表面的ではないもの、確実なものへのこの燃えつくような望み！どんなに憎いか！》[77]は、これをとても良く表現しています。

ですから、ヨハネ・パウロ二世の**《人を丸ごと“感じる”技》**[78]にずっと心を打たれています。人を丸ごと《感じる》ことは生きるために必須で感情的傾向の反対です。けれども、ジュッサーニは《自分自身に対する優しさに溢れる人に出会うことはとても稀である》[79]と言います。そうした人を何人知っているかを数えると、片手でも指が余るでしょう。今日では、現実に対してそうであるように、自分自身や他の人々に対して、怒りや暴力の方がより勝っています。

にもかかわらず、人が経験したいと望むことは、まさに自分自身の人間性に対するこの優しさです。カミュがその著書*カリギュラ*で《なにもかも複雑に見える。だが、なにもかも単純だ。もしおれが月を手にいれていたら、もし、愛（ドリュジュラ）だけで充分だったら、すべては変わっているだろう。この渇きをどこで癒せばいい？どんな心、どんな神が、湖の深さをたたえているのか？[…]この世にもあの世にも、おれに見合うものはなにもない。それでもおれは知っている、おまえもだ[…]不可能がありさえすればそれで充分だ。不可能！おれはそれを世界の涯（は）てまで探しに行った、

---

[76] E. Hillesum, Diario. Edizione integrale, Adelphi, Milano 2012, p. 271.

[77]《Dieser Hang und Drang zum Wahren, Wirklichen, Un‐Scheinbaren, Gewissen! Wie bin ich ihm böse!》（Cfr. F. Nietzsche ,La gaia scienza, Adelphi, Milano 1995, p. 223.　逐語訳

[78] K. Wojtyła, Amore e responsabilità, Marietti, Torino 1980, p. 150. 逐語訳

[79] L. Giussani, Un avvenimento di vita, cioè una storia, Edit-Il Sabato, Roma-Milano 1993. p. 457. 逐語訳

© 2020 Fraternità di Comunione e Liberazione

おれ自身[わたしたち皆が探すもの]の果てまで。[…]おれは両手を差し出す、するとおまえに出会う、いつもおまえだ、おれの前にいる。そしておれはおまえにたいして憎しみでいっぱいになる。（おまえは爪ではぎ取りたい傷のようだ）[…]おれたちは永遠に罪人だ。夜は人間の苦悩のように重い》[80]と書いているように。

わたしたちの渇き、わたしたちの人間性に対するこの優しさを感じさせる“何か”を見いださないなら、愛情とはまったく反対に、これを自分からはぎ取りたい傷のように見ることになってしまうのです。しかし、なぜこれを自分からはぎ取りたいと思うのでしょう？その悲劇を感じないため、その悲劇をできるだけ和らげるため、期待をかけるすべてのことの不十分さを認めないため、望むものと手に入れられるものとの不均衡の損得勘定をしなくて済むためなのです。カミュの言うように《おれに見合うものはなにもない》、または恋愛関係について歌うグッチーニ《愛しい人よ、説明するのは難しい/これまでに分かっていないなら理解するのは難しい…//君は（僕にとって）いっぱいだ、十分ではないけれど/[…]君はすべてだ、けれどもそのすべてはまだ足りない》[81]と言うように。

こうして、優しさ(《人を丸ごと“感じる”技》)あるいは自身の人間性に対する憎しみ（《自分からはぎ取りたい傷》）という二者択一が姿を現わします。わたしたち自身の人間性を監視することも、押し殺すこともできないために、何度苦しみ悩むことでしょう。つまり、全力を尽くしてその人間性を鎮めようとするにもかかわらず、まったく思いがけない時に現れるのです。

ミロスの*ミゲル・マニャーラ*は、そのような経験を模範的な方法で語っています。マニャーラは堕落した生活に身を任せますが、それは自分の人間性の深淵、望みを満たすことはできなかったのです。《わたしは「愛」を快楽、堕落、死に引きずりました[…] 退屈という岩の苦い草を食べています。わたしは怒り、それから邪心と嫌悪とでビーナスに仕えました。[…] もちろん、若い頃には、あなたたちと同じように、哀れな喜びを、自分のいのちを与えても名前を教えてくれない落ち着かない異国の女を求めました。しかし、わたしの中にはすぐに、あなた方が決して知ることのないものを追求したいという望みが生じました。つまり、計り知れず、神秘的で甘美な愛を。[…]ああ！どうすれば満たされるのでしょう、この人生・いのちの深淵は？どうすればいいのでしょうか。なぜなら、望みはより強く、いつになく熱狂的に常にそこにあるからです。すべてを包括する暗い無のもっとも深いところに炎を投げつける海上で

[80] A. カミュ， カリギュラ。岩切正一郎訳、ハヤカワ演劇文庫 18、早川書房、東京 2008 年, pp. 148-149.
[81] «Vedi cara», parole e musica di F. Guccini, 1970, © emi.

© 2020 Fraternità di Comunione e Liberazione

の火災のようなものです!》[82]どんなことにもかかわらず、望みは前にもまして強く存続するのです。これが驚きだと言っているのです。消えることがありません。人が生きれば生きるほど、望みを満たそうとしたり、あるいは考えないようにしたりしますが、それは大きくなるのです。

アウグスティヌスにとって、わたしたち一人ひとりのうちに振動する人の心の深みに比べられるものはないのです。《深淵が深みであるなら、人の心は深淵ではないだろうか。実際にこの深淵より深いものは何であろうか。人々は話したり、手足を動かすのを見られたり、話している時に耳を傾けられたりすることはできる。しかし、誰がその考えに入り込み、心を細かく調べることができるだろうか。人が自身のうちで何をするか、何ができるか、何を熟考するか、何を進んで与えるか、何を望むか望まないか、誰に理解し得るだろうか。従って、人は深みによって理解されることが理性的だと思う。別の言い方で“人はその深い心で近づき、そして神はほめたたえられる”とあるように。》[83]

ではもう一度繰り返しますが、わたしたちを無から引き離すのは何でしょう？何が、この人生の深淵を満たすことができ、《宇宙よりも広大な》[84]わたしたちの中にある人間の徴(しるし)、わたしたちの試みの不完全さ、不十分さを暴く、やっかいであり崇高なこの矮小化できない望みを満たすことができるのでしょうか?

[82] O.V. Milosz, Miguel Mañara. Mefiboseth. Saulo di Tarso, Jaca Book, Milano 2010, pp. 27-28　逐語訳

[83] Cfr. sant'Agostino, Esposizione sui Salmi, 41,13

[84] G. Leopardi, «Pensieri», LXVIII, in Id., Poesie e prose, op. cit., p. 321.

© 2020 Fraternità di Comunione e Liberazione

© 2020 Fraternità di Comunione e Liberazione